

■ 豊田市・保見団地NPO法人「子どもの国」

井村美穂 愛知県豊田市・保見団地NPO法人「子どもの国」の井村です。保見団地は市街地の北西部にあります。外周道路の中に全部で55棟ぐらいあり、高層の団地、また5階建ての団地が建っています。その中には県営と公団がありますが、公団は60%以上が外国籍の世帯、県営は50%以上が外国籍の世帯です。現在、全住民が9,000人ほどで、そのうち外国籍住民は45%を占めています。大部分が南米出身者で人員構成は、働き盛りの若い世代が多く、そのため1歳から6歳まで小さい子どもたちの比率が高くなっています。3歳男児を見れば93%が外国籍の子どもで、日本人の子はあまり生まれていないという状況がハッキリと数字に表れています。2007年度の西保見小学校の新1年生の50%が外国籍につながる子ども、というのがニュースでも流されましたが、その状況がどんどん加速しています。

この団地の中心部に「FOX マート」という店があり、その横の棟にある第2集会所を利用して、私たちのNPO法人「子どもの国」が豊田市から委託を受けて、放課後に学習支援事業「ゆめの木教室」の活動を実施しています。西保見小学校の子が一番多いのですが、東保見小学校、保見中学の子どもたちも通ってきています。定員30人で切っていますが、待機者が非常に多くて、今、20人以上が待機している状態です。集会所の限られたスペースと、人材や組織力としても、これ以上受け入れるのは難しい状況です。



井村美穂

教室は、月曜日から金曜日まで開いており、夏休みもやります。また、水曜日の夜は「そら」といって週に1回だけですが、青少年の自立支援をやっています。このほか、保護者、「子どもの国」スタッフの交流親睦の場を設けるために奇数月の第3土曜日に「交流会」もやっています。

◆ 3年間試行錯誤の繰り返し

次に本題の連携についてお話ししたいと思います。

「ゆめの木教室」は2000年4月に始めました。学校との連携がスタートするまで、初めからうまくいっていたわけでは決してなく、むしろうまくいかない状況が03年ぐらいまで続きました。その理由として、子どもというのはやはり遊び

たいし、宿題をできればごまかしたいものですから、私たちに「宿題がない」「先生がやらなくてもいいと言った」と言ったり、非常に誤った情報が流れます。また私たちの組織も、NPO 法人「子どもの国」としてできたばかりでした。学習支援をやりたくて始めたのですが、実際には物がなくなったり、ガラスが割られたり、毎日運動会のような状況で、何をやっているのか分からないようなこともありました。学校との連携がないものですから、当然、下校時間も分からない、行事も分からない、宿題の内容も分からない。先生が今、この子にどういう指導を望んでいるのか。この子に学力をつけるためにどうしたいのか。そういうことも全く分からない、そんな時代が2年、3年続いたわけです。

転機のきっかけになったのが、02年6月ぐらいに、教室が豊田市自治振興課からの委託を受けるようになったことです。このとき、市の職員の方との素晴らしい出会いがあって、これができたと思いますが、まだその時点では、NPO法が施行（99年）されてそれほど日がたっていないこともあり、学校の先生方も市の職員もNPOというのはいったい何だ、信じていいものか、相手にしているのか、みんなが分からない状況でした。

そういう中で市が、NPO法人の価値を認めて、市の目指す事業ということで委託金を出すようになり、ボランティアに交通費を払えるようになりました。その辺から少しずつ、組織もできました。私自身は名古屋市内に住んでおり、毎日、保見団地に通っているのですが、団地に来るのがやっとな感じで、この先、どうしたらいいのかとか、毎日がフラフラな状態でした。周りにおいて、一緒に活動を支えてくれた方々がいろいろなアドバイスをしてくださいました。子どものために学校との連携が重要だということで、すごくいいアドバイスをいただきました。

組織も03年ごろから徐々にまとまりました。毎年度末に、この1年「ゆめの木教室」に通ってどうでしたかとか、子どもさんはおうちの方ではどんな様子ですかとか、保護者からキチンと聞き取りなどができるようになってきました。また、毎月、保護者に「ゆめの木教室」の出欠の連絡や、隔月ですが、学習状況などをポルトガル語、スペイン語で報告するようになっていたので、我々が持っていた情報を学校に伝えました。「ゆめの木教室」では、どういうことをしているのかということキチンと学校側にお見せすることで、学校の姿勢も次第に変わってきました。

そんなとき、西保見小の教頭先生が「ゆめの木教室」の出欠の状況をできれば毎月見せてほしいと要望してきて、それからは毎月、出欠の状況を見せに行きま

した。その中で家庭的にもすごく複雑で心配な子の情報を交換したり、また学習面についてもお話をすることが徐々にできるようになりました。最初は年に2回程度だったものがいろいろこちらが情報を出すことで信頼していただき、今は毎月出欠を出すようになりました。そして、最初は問題行動などの話でしたが、徐々に学習面についても、例えば、西保見小の日本語教室ではどういうことをやっていて、この子に対しては今、これに力を入れている。それをキチンと学校から教えていただいて、その方向で私どもも努力するというような連携が次第に形作られていったのです。

私たちは、子どもたちに対して、学校には行かなくていいよ、「ゆめの木教室」に来て、学ぶこともできるんだよとか、そういう姿勢は全く取っていません。あくまでも学校に行く子どもたちがより学校に通いやすくなるためのサポートをしていくんだということを学校側にも理解していただくよう一貫して言い続けてきました。「ゆめの木教室」がやっていることは、この子たちが継続的に学校へ通い続けるための支援、お手伝いということです。

事例をお話ししますが、例えば、外国籍の子で日本語教室に通っている子に日本語教室担当の先生が「今年1年あなたは漢字ノートを1ページ毎日頑張ること」と言い、これを1年続けて、本当にやっという目標を子どもと共有して決めたとします。でも、子どもというのは、できませんよね。遊びたいし、ほかの優先順位のほうが高い。それを私たちは、A君、あなたは、先生と約束したんだよね、この1年はこれを頑張るんだよね、と言えるんです。キチンと学校で決めたことをやらせることができ、そうすることで本人の自信にもつながっていきますし、もちろん学力もついてきます。そういう積み重ねで少しずつでも自信を持てるようになってほしいという、本当にささやかではありますが、そういうことをやっています。

団地の中には、本当に複雑な家庭環境の世帯も少なくありません。義理のお父さん・お母さん、また義理の兄弟など、さまざまな本当に複雑な家庭環境の中で子どもたちは生活しており、精神面でも特別な支援が必要なケースが多く、親子カウンセリングを2年続けている親子がいます。

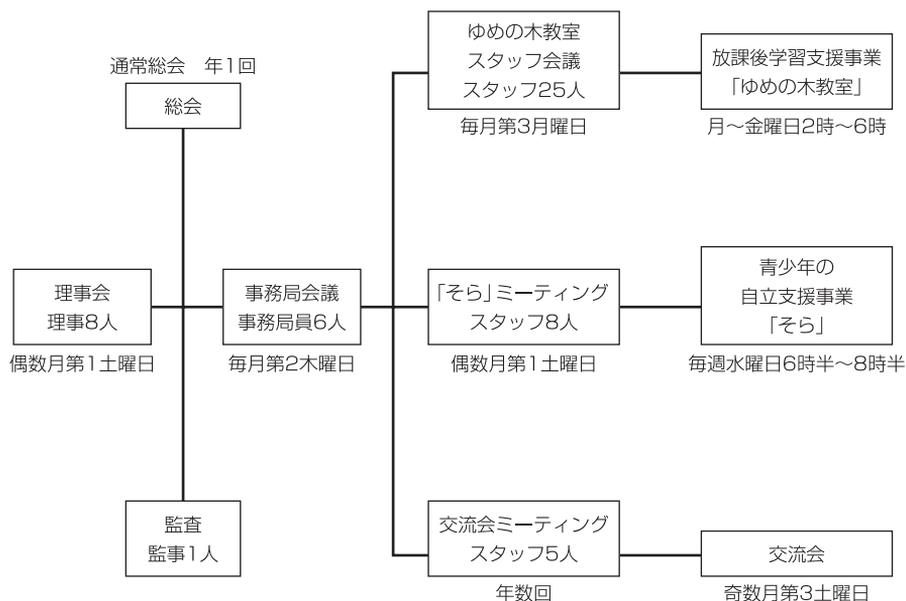
そういう子どもについても、学校の方から毎日のように今は電話があります。今日は非常に不安定で、壁に頭をぶつけていたとか。それを聞いて、「ゆめの木教室」でも注意深く、その子の心の状態を酌み取りながら見る。そうして、専門機関の豊田児童相談所と連絡を取って、カウンセラーの方にもお伝えするとか、そういう連携が本当にスムーズになりました。今は、もちろん学校だけではあり

ませんが、学校との連携なしにはやれません。事例については、プライバシーのこともありまして、あまり細かいことは言えませんが、本当に重要だと認識しています。

◆ 継続と透明性がカギ

今後の展望についてですが、先ほど言ったように二十数人の待機者がおり、断り続けている状況で、2年以上待ってけている子もいます。NPO 法人としては、今、支援が必要なわけですから、すぐにでも対応したい。でも、本当に限られたスペースで、実はスペースの問題だけではないのですが、スタッフの数も考えると、今、責任を持ってキチンとお引き受けできない。断るのはつらいことです。それに関して、どういう方向があるのかということをも今、事務局会議、理事会などで検討していますが、できれば社会全体の仕組みに持っていきたいと思っています。

NPO法人「子どもの国」の組織と活動



豊田市では、放課後に児童クラブがあります。06年から3年続けて、団塊の世代の先生方が退職されますので、そういう方のお力をお借りして、何とかその学校の空き教室でも「ゆめの木教室」の機能を展開できないか。また、公立の中学校ではクラブ活動などがあります。そういう中で補習をしていただけるような、学校でクラブというような位置づけでそういうことが可能にならないのかとか、いろいろな方法を模索しています。

団地から出て、集住ではなく、点在地域に引っ越す子もおりますので、市全体として外国籍の子がこぼれてしまうことがないように仕組みをつくっていくことが必要なのではないかと思えます。それに当たって、8年間放課後学習支援の活動を続けてきておりますので、使える部分というか、スタッフ研修とか、さまざまなノウハウの蓄積を皆さんに使っていただきたいと思っています。また、他地域でも何かお役に立てることがありましたら、ぜひ言ってください。

まとめかまとめではないかよく分かりませんが、学校と連携する上でとても重要だと私自身が感じているのは、1番目は継続だと思います。1年の活動では学校との信頼関係をつくっていくのは本当に難しい。私たちはむしろ特別な例だと思っています。それをそれぞれの市町村で、では、どういう形なら、その地域での継続が可能なのかを模索する必要があると思えます。とにかく継続していくことがとても重要だと思います。

もうひとつは透明性です。何をやっているのか分からないという状況が一番よくないと思います。こちらの方からいろいろな情報を発信して行って、そして、透明性を出していくことで信頼関係が生まれると思えますので、その継続性と透明性は非常に重要ではないかと思えます。

藤田 次に福岡市東区の香椎浜小学校「よるとも会」副代表、古賀美津子さんに会の活動を報告していただきます。

■ 福岡市立香椎浜小学校親子日本語教室「よるとも会」

古賀美津子 福岡市の親子日本語教室「よるとも会」の古賀です。まず、私が住んでいる地域、福岡市の香椎浜についてお話しします。香椎浜小学校校区という地域ですが、半径1キロ以内に2,000世帯の人たちが暮らしているところです。その中に外国から来られた方々が200世帯以上います。私たちの生活の中では、お買い物に行っても、学校に行っても、道を歩いていても、外国の方とすれ違っ